

# 清末期蚕業留日学生と中国近代蚕糸業

## ——蚕業から蚕学へ

王 怡然

### 要 約

#### 1. 問題の提起

本研究で扱う「蚕業」は、栽桑業、蚕種業、養蚕業、製糸業、真綿製造業を包括するものである。「蚕学」は、蚕業の改良と発展をはかるための学問である。本研究の目的は、中国近代蚕学史の源流を、清末期に蚕業を学ぶために来日した留学生（以下、これらの留学生を蚕業留日学生と略す）を通じて明らかにすることである。本論文で言う「清末期」は、最初の蚕業留日学生が来日した 1897 年（光緒二十三年、明治 30 年）から辛亥革命が起こった 1911 年 10 月までとする。留学思想史による区分法や近代製糸業史による区分法によって対象期間を設定することもできるかもしれないが、辛亥革命が社会全体や留学生政策に大きな影響を及ぼしたので、本研究は政治史の区分法に従って辛亥革命を対象期間の下限とする。しかし実際には蚕業留日学生に関する資料上の制約から、『中国蚕糸業会報』第 6 期が刊行された 1911 年（宣統三年、明治 44 年）1 月までを下限とする。特に蚕業留日学生が大量に来日した 1906 年から 1910 年までの時期に力点を置く。

中国近代蚕学史の源流は清末期に遡る。当時清国国内では蚕業を振興するために、様々な工夫が行われた。その際、蚕業人材の育成もその重要な一環である。国内の各地には様々な蚕業学校が断続的に設置されたが、教員不足のため、杭州蚕学館や湖北農務学堂のように日本人教習に依存せざるを得なかったし、設備・予算などの制限を受けて、必ずしも質のよい教育が行われたとは限らなかった。そこで多くの人が、地理的に近く、費用が安く、同じ漢字が使用される日本を留学先として選択した。この近代第一世代の蚕業留日学生が蚕業専門家として、いつ、どれほど、どの省から来日し、日本のどの学校で学び、いかなる活動を行い、さらに帰国後中国に何をもたらしたか、といった問題は、中国の近代蚕学史を研究する上で避けて通れない大きな問題である。

しかし従来の研究は、羅振玉らが上海で創刊した『農学报』（1897 年～1906 年）、杭州蚕学館（1897 年許可、翌年開校）、鄭辟疆、費達生などに焦点を当て、清末期の蚕業留日学生に特化した研究は資料の散逸などもあって皆無に近い。本研究は日中所蔵の豊富な史料を掘り起こし、蚕業留日学生の実態や彼らが日本で展開した活動を明らかにすることを通して、清末期蚕学史の研究に新たな知見を加えようとするものである。

#### 2. 本論文の構成

本論文は二部に分かれ、十章から成る。

第一部は三章に分かれ、留学生の留学実態を明らかにする。

第一章では、蚕業留日学生の人数、最初の蚕業留日学生、蚕業女子留学生について検討する。1897 年、杭州蚕学館より埼玉県の競進社へ派遣された嵯侃と汪有齡は蚕業留学の濫觴であり、同時に最も早い時期に来日した清国官費留学生でもあった。その後、蚕業留日学生は少しずつ増加し、1906 年から 1909 年にかけてピークを迎えた。留日学生の中で 1905 年に東京

蚕業講習所に入学した潘英は、清末期女子留学生本科卒業生の第一号であった。

蚕業留日学生は早い時期に来日したものの、本研究で明らかにした249人という蚕業留日学生数は、数万人以上といわれる清末期留日学生の総数に比べると、数的には多くなかった。その理由としては、「学而優則仕」（学んで優なれば則ち仕う）という伝統思想の影響を受けて農業や蚕業を軽視する風潮がはびこっていたこと、法政学校や師範学校に比べて高等蚕業学校への入学のハードルが高かったことが挙げられる。

これらの蚕業留日学生の出身省は、清国18省のうち、甘肅省を除く17省に分布していたが、最も多く来日したのは、製糸業が最も発達した江蘇省、浙江省、広東省ではなく、中国大陸西部の奥地に位置する四川省の留学生（90人）であった。彼らの多くは錫良総督時代（1903～07、在任）に来日し、趙爾巽総督時代（1908～10年1月、在任）に帰国した。

第二章と第三章では、留学生の留学先を紹介し、どの地域に留学生が集中しているかなどを明らかにした。官立2校—東京蚕業講習所、京都蚕業講習所はあわせて54人の留学生を受け入れ、33人の卒業者を出した。彼らは主として広東省、浙江省、江蘇省の出身であり、帰国後に行われた官吏登用試験にはほぼ半数（16人）が合格した。留学生の大半（195人）は私立5校の（群馬県）日清蚕業学校（のち東亜蚕業学校に改称された）、（長野県）信濃蚕業学校、（群馬県）私立甲種高山社蚕業学校別科、（東京府）東亜蚕業伝習所、（東京府）東亜学校蚕業科で学んだ。私立5校の出身者らは模範蚕業社を創設し、養蚕製種を経営したり、養蚕人材を養成したりした者や四川省最初の蚕業専門誌『蚕叢』を創刊した者もいた。このように私立5校も中国蚕業のために多くの人材を養成した。

第二部は留学生の留学中の活動を明らかにするため、七章を設けた。

第四章では近代中国初の蚕糸業学会—中国蚕糸業会について検討した。1908年の夏頃、中国蚕業の遅れを痛感し、列強の清国への蚕業進出に対する強い危機意識を抱いて、杜用選や日本駐在商務委員黄遵楷らが中心となって、東京で中国最初の蚕業組織—中国蚕糸業会を立ち上げた。本会は留学生が主体となり、黄遵楷の直接的な指導と在日華僑の豪商呉錦堂などの支援のもとで運営された、学官産連携の要素が強い組織である。会員、特別会員、名誉会員が国内外や蚕業界内外に及び多数に上ったことから、蚕業振興を通して中国を危機から救おうという認識が広汎に共有されていた。

第五章では、帰国後の留学生が積極的に行った活動の一つとして北京に成立した中華民国蚕糸会を取り上げた。帰国後（1913年）、留学生らは中国蚕糸業会の事業を多数受け継ぎながら、北京で中華民国蚕糸会を創立した。この会は成立後の頻繁な人事異動や資金不足などのため実際に活動を行った記録は見当たらないが、全国的な蚕業組織を通じて蚕業振興を図ろうとした、留学生時代以来の組織重視の姿勢は一貫して変わらなかった。

第六章では、日清蚕業学校留学生が中心となって早期に創刊した農学・蚕学に関する専門誌『農桑学雑誌』について考察した。『農桑学雑誌』は日清蚕業学校、北海道農科大学、東京蚕業講習所の留学生が創刊した農業・蚕業の雑誌である。汎論、科学、雑録の文章が37点掲載されたが、四川省留学生の杜用選はそのうちの約半分を執筆しており、本誌の中心的な存在であった。本誌は1907年6月の第1号と同年7月の第2号しか確認できないが、羅振玉らの『農学报』に次ぐ、早期に発行された農業・蚕業専門誌であり、当時の農業・蚕業留学生の動静を知ることのできる重要な史料である。

第七章では、中国蚕糸業会の機関誌である『中国蚕糸業会報』を取り上げて考察した。本誌は1909年に東京で創刊された中国蚕糸業会会誌で、『農桑学雑誌』と密接なかかわりを持ちながら大いに発展した現存する最も早い時期の蚕業専門誌である。現在、第1期（1908年8月）から第6期（1911年1月）までは確認できるが、第7期（1911年3月）から最後の第9期（1911年旧暦6月）までは不明である。本誌は広東など全国の多くの

省から多数の注文があり、第1期と第2期の発行部数は数千冊にも達し、その中の一部の文章は『湖北農会報』や『山西実業報』に転載されたことなどから、蚕業改良は、留学生のみならず社会の各界にも高い関心を持って共有されていた重要な問題であった。

第八章では、蚕業留日学生の著書と訳書について考察した。留学生らは1907年から1910年を中心に、自力で、『増補実験夏秋蚕新書』（宮下智三郎、滝沢七郎著、松陽堂書店、1903年）などの6冊の本を翻訳し、『魯桑栽培新法（一名湖桑栽培新法）』（倪紹雯著、新学会社、1910年）などの8冊の本を著し上梓した。少し前の『農学報』時代には、蚕業に関する翻訳はほとんど日本人によって行われていたのであった。留学生らの翻訳書や著書は現行の各種の図書目録には収録されていないが、中国人が最も早い時期に残した近代蚕業に関する著書であり、『農桑学雑誌』や『中国蚕糸業会報』と共に、早期の蚕業留日学生の学術活動を知るうえで、きわめて貴重な史料である。

第九章では、留学生たちの上書について分析した。会員らは1908年6月から1911年1月にかけての2年半の間に9通の上書を送った。彼らは蚕業振興のために、農工商部（3通）のみならず、四川総督（3通）、広東勸業道、前浙江巡撫、広東省の嘉応州知州（以上、各1通）に宛てて、積極的に助言した。一介の学生の身分でありながら、これほど上書を送って政府に助言しつづけた例は多くなかったかもしれない。また9通のうち7通は四川留学生在が占め、杜用選や陳蔚文のように2通も上書した者もいた。当時は四川総督によって強力かつ実効性のある勸桑政策が推し進められていたことも背景となって、このような多数の意見書を提出されたのであった。

第十章では、杜用選の組合論を考察した。杜用選は中国最初の合作思想の紹介者の一人であり、彼の組合論は群馬県で留学中に形成され、実践志向を持つものであった。またこの認識は日清蚕業学校留学グループと共有され、彼らは、中国農村の不平等を是正するために、日本の組合制度を導入しようとした。特に杜用選は「蚕糸業組合」を「救国の第一策」とまで考えていたことを明らかにした。

結論では、以上の結果をまとめ、清末期に来日した蚕業留学生の特色を指摘した。蚕業留日学生の人数は少ないが、早期に来日した留学生である。彼らは蚕業技術の普及から蚕業制度の導入へ、蚕業の改善から農村の制度の改善へと認識を深め、それを体系的に中国に導入しようとたゆまぬ努力を重ねた。各章の考察を通してその事実を明らかにすることができた。

なお、本論文の背景を成すものとして副論2篇を付した。副論1は中国最初の蚕学研究団体小考であり、2は峰村喜蔵とその清国蚕糸業研究である。